

雪冠玉 (*Gymnocalycium hyptiacanthum*) について

2018年3月30日

島田壽男

以下の文章では、分かり易くするため、著者の記述は黒字で、参考文献からの引用部は藍色で、文献の内容等に関する著者のコメントや註釈は括弧に入れて註と記しています。

世界にはカクタス(サボテン)の専門誌は、いくつもある、有名なドイツの *KuaS(Kakteen und andere Succulenta)* は 1800 年に発行されているので、かなりその歴史は古いが、それ以前にもドイツでは別の雑誌も発行されていた。このような雑誌は、カクタス以外にも多肉植物を話題に取り上げているので、内容は非常に広範囲に及んでいる。その一方でカクタスや多肉植物を取り扱う雑誌には、単一の属だけを取り扱う雑誌も幾つかある。このような雑誌の中に、ギムノカリキウム属を専門とする雑誌がある。古くはドイツのカクタス愛好家協会 (DKG) が発行した “Gymnos” がある、しかし、発行部数が伸びず、残念ながら 10 年程度で廃刊になった。廃刊になる少し前(1988 年)に、オーストリアのカクタス愛好家協会内のギムノカリキウム愛好家グループ (正式名は AGG=オーストリア・ギムノカリキウム作業グループ) による雑誌 “Gymnocalycium” の刊行が始まった。限定された読者層の中での、発行の維持という難しい環境の中、今年で発行から 31 年目を迎えている。少し前 (2010 年)、ドイツやオーストリアのギムノカリキウム愛好家に拠る、インターネットでのギムノカリキウム属の専門誌 “Schütziana” の発行も開始された。インターネット誌の利点は、雑誌の印刷費がなくなる (読者は、雑誌発行サイトからダウンロードするだけ) ので、発行維持が容易になる。サイトの維持費用ぐらいで、著者はボランティアと思われる。その結果、印刷費を気にかける事なく、写真の枚数を増やせる。“百聞は一見にしかず。” という諺があるように、文章で巧みに説明しても、写真を見る方がより理解が進むので、写真の枚数はカクタスを扱う雑誌にとって有力な手段である。さて、これらの専門誌は、主に二つのテーマを取り扱っている、一つは新種の記載、属の分布域が広く、現在でも新種の発見の確率の高い、ギムノカリキウム属は雑誌には好都合な話題である。残りの一つの主要なテーマは、古い時代に記載された種の改訂である。以前は、現在のそのような記載方法が確立しておらず、当時の時代背景の影響もあり、著者毎にばらつきがあり、詳細な記述から、粗雑な記載まで、多種多様であった。そのため、後の人が、記載された種の同定が出来ない事も多々あった。それらの種を、原記載等の資料を基に現地で新た調査する事で、種の同定に必要な十分な記載方法に改める作業が、改訂と呼ばれる作業である。この作業の中では、国際植物命名規約 (ICBN) に沿って、ホロタイプや、ネオタイプの指定、それらタイプの、植物標本館への寄託が行われる。新たな記載の中では、分類群内での変異性の幅や、亜種・変種等の新記載も行われる。

このような論文の中で、数年前、“Gymnocalycium” 誌 (2010 年) も “Schütziana” 誌(2010 年)も共に取り上げたテーマが “*Gymnocalycium hyptiacanthum*” である。この事はアルゼンチンのキースリング氏 (R. Kiesling) が 1999 年の論文でこの種に対して、南ウルグアイのフロリダ (Florida) 周辺産の植物でネオタイプ(実際の論文ではレクトタイプ)の指定を行った事が関連していると思われる。しかしヨーロッパでは 2006 年ハント氏他 (Hunt D. et al.) (The New Cactus Lexicon) によりこの名前は国際命名規約 (ICBN) 57 条 1 項により拒絶された。この条項は『その学名のタイプを含まない、一つの又は複数の分類群に対して広くかつ一貫して使用されてきた学名は、14 条 1 項、または 56 条 1 項の下でそれを処理するための提案がなされ、かつ棄却されない限り、そしてそれまでの間も現在の使用法と矛盾する意味で

使ってはならない。』と述べている。Gymnocalycium 誌ではティル氏 (H.Till)とアンメルハウザー氏 (H.Amerhauser)氏が “*Gymnocalycium hyptiacanthum* (Lem.) Britton & Rose の混乱した歴史” というタイトルで、一方 Schütziana 誌ではメレガリ氏 (M. Meregalli) が “*Gymnocalycium hyptiacanthum* (Lemaire) Britton & Rose ; その名前の歴史、歴史的な解釈、そのネオタイプ、そして命名法的考察” というタイトルで論文を書いている。しかし両者の立場は明確に異なる。メレガリ氏はウルグアイエンセの名称で市場に出まわっている種を、シュツ氏やシュロッサー氏が KuaS の論文で区分し、キースリング氏がタイプ指定したようなウルガイ産の種を *G.hyptiacanthum* と見做している。一方ティル氏達は、初記載以降、その種は趣味家のコレクション中で長く保存され、維持されていた、そしてシューマン氏 (C.Schumann) が最初に画像で示し、その後の文献に描かれている画像を根拠に、同じくウルグアイ産であるが、亜属が違ふ、現在 *G.schroederianum* で知られている種の形態の一つを *G.hyptiacanthum* であると見做している。その考えの下でそれぞれの論文は記述されている。

この種の記載は、非常に古く、メレガリ氏の論文中では 1839 年フランス人のルメール氏 (C.Lemaire) が文献 “Cactearum Genera nova specique novae et omnium in Horto Monvillianum cultarum ex affinitatibus naturalibus ordination nova indexque methodicus(註：ラテン語：モンビル氏の庭園で栽培されている、自然な区分の関係に基づく新しい登録方法でのカクタス科の新属の全ての新しい種)” に初めて記載したとある。一方ティル氏達の論文では同じ 1939 年だが、文献名は参考文献に挙げられていないので不明で “Cactearum aliquot novarum et insuetarum accurate description etc.(註：ラテン語：いくつかの新しくて珍しいカクタス科の正確な記載等)” に記載したとある。もしかしたら論文の題名かもしれないが、両者が指示している参考文献の名前は同じでは無い。因みにクラインツ氏(Krainz)の文献では、参考文献は “Cact. Gen. Nov. sp. 1839, S.21, 22” と指示されている。命名された名前は **Echinocactus hyptiacanthus Lemaire**、名前の意味は “曲がった刺を持つ” である。

ティル氏等の論文には、ルメール氏の記載(ラテン語)が完全に引用されている、ラテン語の判別文とそれに続く詳しい説明は以下のようにになっている。(註：括弧内の文章は著者による補足)『(胴体は)細長い、(頭頂部は)大いにへそ状になっている (註：中央部が窪んでいる状態)、(表皮は)豊かな緑色(註：暗緑色とも解釈できる)、(稜は)11 個、コブのある稜になっている；縦溝は揺らいでいる。(註：真っ直ぐではないという意味)；コブは殆ど 6 辺形；刺座は卵形：刺は 7 本、不揃い、非常に小さい、非常に細い、幾分硬直している、明らかに植物本体に向かって内側に曲がっている、金のような黄色；4 本は両側の側面へ (註：以下はより詳しいラテン語の説明文)、コブは垂直方向に 11 個の列で並んでいる。：下部でありきたりの 6 辺形、それらの間は、少し短い横向きの、深い溝で分けられている。；コブの底面で幅は 10mm から 13mm まで。；縦溝は反り返っている。(註：湾曲している)、その後、平ら、真っ直ぐに走り下る緑色の直線が観察される。刺座は卵形、綿毛は幾分綿屑状、白っぽい、長く留まっている、そして間もなく灰色で固く締まる；6 本あるいは 7 本の刺；刺の束の先端の 1 本あるいは 2 本は垂直に向いている、殆ど剛毛状では無い、1 本は 1.25mm、4 本は両側方に向いている、その中で下の 2 本は幾分頑丈、長さ 7.5mm から 10mm。；最後の下の 1 本は、12.5mm から 10mm の長さ、(註：lin.=0.1 インチ)全ての刺は、例え十分硬いとしても細い、植物本体の方へと内側に曲がっている、金色、先端と根元では暗い赤紫色、最も素晴らしい、最も際立った種、**Ech. gibbosus** に類似、しかし、完全に天まで届くほど異なっている。(註：当時、知られていた種は、**E.denudatus** や **E.gibbosus** でそれらとの比較をしている、どちらかという **E.gibbosus** に近いが、その種と全く異なるとルメール氏は述べている。) 記載した個体は高さで約 6.5cm(2.5 インチ)、直径で 5cm(2 インチ)しか計測していない(註：pollicis=インチ)、それにも拘らず殆ど成長した個体のように思われる。分布、花、果実はこれまで不明。)

当時としては、かなり詳しい記載であるが、現在の基準からすると、形態学的な分類にとって最も重要で必要不可欠な情報である、分布地域、花、種子の情報が欠けている、そのため後の時代に、種の同定に関して大きな混乱をもたらした。

二つの論文は、ともにハント氏達の立場とは違い、学名 *G.hyptiakanthum* を有効にする立場であるが、中身はかなり異なる。メレガリ氏はキースリング氏の立場に近い、しかしタイプとして指定された、南ウルグアイ、フロリダ産のネオタイプ指定は間違っている可能性を後の論文で指摘している。最初に、ハント氏達が依拠した、ICBN の条項にある、“広くかつ一貫して使用されてきた。” はかなり曖昧で、その条項の適用に幾分混乱を与えると述べ、その名前の“現在の用法”が何かを確かめるために欧州でのこの種の記載の歴史を説明している。以下メレガリ氏の論文の内容を年代的に記述する。その後ティル氏達の論文について述べる。(註：以下は特に断らない限り、論文の内容を原文に沿って記述するようにして紹介しています)

1845年：フェルスター氏 (Förster) はこの種は 1840 年に栽培されるようになったと指摘しているが、ルメール氏の記載は 1839 年で、本来のコレクションを参照出来なかったはず、また彼の記載はルメール氏の記載よりももっと一般的であった。

1853年：ラボール氏 (Labouret) は花の色を白と記載した、また彼の記載はルメール氏の記載と完全には一致しない。元のラテン語のフランス語訳も間違っている、例えば刺は根元まで全て黄金色そして先端で赤紫色 (原文は赤い根元と先端を持つ黄金色)。ルメール氏は同じ植物を記載したと書いているが、植物の意味が曖昧で、種の意味で使った可能性もある。ラボール氏は *E.hyptiakanthus* を *E.multiflorus* と結びつけた、しかし、二つの分類学種は初発表文に拠れば確実に別個である、ラボール氏の解釈は恐らく間違っている。*E.multiflorus* と *E.hyptiakanthus* 間の混乱は少なくとも半世紀の間、繰り返し現れた。

1866年：リュンプラー氏 (Rümppler) の著作にこの名前は出現する。彼は花が白から黄色っぽいと指摘している、しかし由来は指定していない。

1896年：ウエーバー氏 (Weber) は仮説的に由来の国として疑問符を付けてウルグアイと報告した、そして花は白と指摘した。

1903年：シューマン氏 (Schumann) が花は白から黄色っぽいと指摘し、そして種子はツイーディ氏 (Tweedie) から 1840 年にウルグアイから送られたと述べた。この情報はフェルスター氏に引用された植物に適用できるかもしれない、しかしルメール氏の記載した最初の植物には対応させる事は出来ない。ツイーディ氏に送られた種子がウルグアイで採取されたかは疑わしい。何故なら彼はブエノス・アイレスとブラジルでの仕事で知られているから。しかし、これがルメール氏の記載で提供されたウルグアイ産植物への名前の適用である。シューマン氏の資料にはギュルケ氏 (T.Gürke) による描画を含んでいた。これが、この名前の植物に対する最初の挿絵である。この描画は最初の記載に殆ど一致しない。それは *G.schroederianum* かもしれない。その種は実際ウルグアイでも生えている種で長年後に初めて正式に学術記載された。しかし、19 世紀の末に *E.hyptiakanthus* として育てられたものを同定するには役立つ。

1905年：アレチャヴァレッタ氏 (Arechavaleta) は中央ウルグアイ産の二つの新種を命名した、彼は一つに以前の *E.hyptiakanthus* の記載を複製した、しかしそれに対するウルグアイの場所を何も明記しなかった。

1907年：シェーレ氏 (Schelle) は以前の学術記載を複製した、そして花は白から黄色っぽいと報告した。すばらしい色つきの描画がドイツカクタス協会により Blühende Kakteen (花の咲いたサボテン 1914 年、図版 164) に公表されている。これはギュルケ氏 (T.Gürke) により図解された植物とは確実に異なる。それを同定する事は難しいが、ブエノス・アイレス州産の *G.reductum* の一つの形態に該当するかもしれ

ない。

1922年：ブリットン氏 (Britton) とローズ氏 (Rose) は非常に簡潔な記載でこの種をギムノカリキウムに組み合わせた。白い花の指摘に戻った、ウルグアイは由来の国として引用されている。この時期膨大な数の個体例が南アメリカからヨーロッパへ輸出された。これらにはウルグアイ産の植物も含まれていた。

1929年：クッパー氏 (Kupper) は比較的強い刺の植物を記載し、白い花を記載している、そしてその分布をウルグアイと与えた。彼の文献にある挿絵はウルグアイ産の植物と言うよりも *G.reductum* の形態により類似しているように見える。

1929年：ベルガー氏 (Berger) の取り扱いも類似していた。

1947年：ウルグアイ種の採取家ミュラー・メルヘス氏 (Müller-Mulches) は “*hyptiacanthum*, *leeanum* あるいは *Guerkeanum* に関連する異なるギムノカリキウム種は恐らく生息地形態、、、、明るいレモン色の花” と言及しながらウルグアイのカクタスを一般的に論じている。この文章はウルグアイ種の採取家達は *hyptiacanthum* の名前をウルグアイ産植物へ、書類の形で帰しはじめていた事を示している。一方、ヨーロッパでは、その名前は常に未記載の植物と関連して混乱した帰属を維持していた。

1956年：クラインツ氏 (Krainz) は花被の内側は白あるいは白から黄色っぽいと指摘している。そしてその種はアルゼンチンに分布していると示唆した。著者は二つの写真を論文に添えていた。一つはチューリッヒ多肉植物コレクションで40年間栽培された植物が参照されたと言われている。図の一つはクッパー氏により描かれた植物に非常に類似している。

1959年：バッケバーク氏はウルグアイ産植物にこの名前を引用する事に戻った。そしてその種を *G.leeaanum* (1922年の Britton & Rose 氏の意味での) (註：*G.leeaanum* はその後改訂されて *G.reductum* に関連付けられているので、特にことわり書が付いている。) と *G.netrelianum* と結び付けられた。(註：バッケバーク氏の特殊な分類法で同じ分類群に入っている) 花は白から黄色っぽい白と言われていた。(註；花色は黄白色とある)

此处で、メレガリ氏はストリグル氏 (Strigl) のコレクション中で、文書で記載されていない個体の側芽で伝えられた植物の写真を示して、『クッパー氏やクラインツ氏により公表された絵とよく一致する。』と述べ、『その花は小さい子房で、花被は非常に淡い黄色、花喉部は僅かにピンクに染まっている、比較的強い刺はブエノス・アイレス州南部産の現在 *G.reductum* ssp. *schatzlianum* として同定されている植物を想起させる。』と述べている。

更に『Punta Ballena 周辺産の幾つかのウルグアイ産植物は1本の中刺を持つ可能性を指摘し、ただ刺それほど強くない、花は小さく、花喉部にピンク色の痕跡は無い、より明瞭な黄色、この植物から種子は取れなかった。』と述べている。(註：ルメール氏の初発表文には中刺の事は特に述べられていない、上の1本あるいは2本は垂直に向くとあるので、もしかすると中刺の可能性もある。その後の文献に現れる *G.hyptiacanthum* の挿絵や写真の植物は中刺があるように見えるので、中刺を話題にしたと思われる。)

1982年：シュロサー氏とシュツ氏 (H.Schlosser & B. Schütz) は幾つかの異なる個体群からの研究に基づき、ウルグアイからの直接の情報を伝えた。(註；KuaS に掲載された論文の事。この論文では『ウルグアイに生息するギムノカリキウム種はグループを形成している。これらのグループは3つの形態集合に分割する事が出来る。(1) *Gymnocalycium uruguayense*, *G.artigas* と *G.guerkeanum* を含む、これらは、刺が3本から5本で、刺は長さ太さで大きく変化する。この論文に掲載されている写真の個体は比較的刺は太い。(2) *Gymnocalycium hyptiacanthum*, *G.netrelianum* を含む。これらは主にウルグアイ南部に生息し、小さなコブ隆起のある稜と7本から9本あるいは11本の縁刺を持つ、刺は比較的細い、稀に1本の短い中刺が出現する、(3) *Gymnocalycium schroederianum*、これは、最初の報告ではリオ・

ネグロ河の土手、しかし後の発見で土手から離れたかなり内陸部で見ついている。他のウルグアイ産植物と異なり、非常に長い、スリム花筒と黄色っぽい白い花、そしてより小さい種子により異なる。』と記載されている。) 著者達は個体群内や個体群間の顕著な変異性も論じている。そして『20世紀の最後の20年間、ヨーロッパで育てられているウルグアイ産植物の大半はシュロサー氏から受け取ったので、*G.hyptiacanthum* の名前は南ウルグアイで発見された植物により首尾一貫して適用されている。』と述べている。(註：従って、以前はともかく現在ではハント氏達の指摘は該当しない、よってメレガリ氏はキースリング氏のタイプ指定は有効であると主張している。)

1999年：一般的な、少なくとも南アメリカにおいての解釈に従って、命名法の安定性を助けるためにキースリング氏は南ウルグアイ、フロリダ (Florida) の町の南端にある丘陵 Cerro Pelado で発見された、基部が明瞭に赤っぽい刺で特徴付けられた個体群に属する植物を使って *G.hyptiacanthum* に対するネオタイプ指定をした。

2001年：パプッシュ氏 (Papsch) は間違っ、キースリング氏のネオタイプの指定を無効と考え *E.hyptiacanthus* は後に *G.schroederianum* Osten として学術記載された種を参照できると示唆し、新しいネオタイプを寄託し、*G.hyptiacanthum* = *G.schroederianum* の異名であることを提案 (註：2001年の *Gymnocalycium* 誌に発表した論文を意味する。正確には *G.schroederianum* ssp. bayense)、(註；Papsch 氏は後に発表した論文で、自らの誤りを訂正している。)

2010年：ティル氏とアンメルハウザー氏達は、この解釈を採用した。

メレガリ氏の見解は、『*E.hyptiacanthus* の初記載後、植物の取り違えがあった。その一つはシューマン氏の挿絵に描かれているもので、これは *G.schroederianum* である、その後もこのタイプが多く著者により、ヨーロッパでは受け継がれていた。もう一つのタイプは *G.schatzlianum* として売られているタイプである、この他 *G.multiflorum* (*G.monvillei*) は一度ある業者により誤って *G.hyptiacanthum* の名前で販売されたから、この影響もある。しかし 1982 年に KuaS のシュッツ氏とシュロッサー氏の論文で *G.hyptiacanthum*、*G.uruguayense*、*G.schroederianum* が分離されて明確に分離・解説された。それ以降ヨーロッパに輸入された *G.hyptiacanthum* は彼らの解釈に拠る植物で、過去はともかく、現在は名前の混乱は存在していない。従ってキースリング氏の *G.hyptiacanthum* のネオタイプ指定は有効である。』という事になる。

此処から長いティル氏とアンメルハウザー氏の論文の内容を簡単に紹介したいと思う。彼らは、*E.hyptiacanthus* の歴史を同様に文献から辿っている。

1839年：ルメール氏 (Charles Lemaire) が新しいエキノカクタスを記載し *Echinocactus hyptiacanthus* と命名した。(註：ラテン語の文章は既に、最初に紹介した)

1841年：“Allgemeine Gärtnerzeitung (総合園芸新聞)” 31号に、バークハルト氏 (Burghart)による、フランス語、及びラテン語で発表された原文がドイツ語に翻訳されて載っている。(註：引用されている文章を見る限り、細かい表現を除いてほぼ正確に翻訳されている。)

1843年：バルペルス氏 (G.G.Walpers) が短い、新しい *E.hyptiacanthus* の学術記載を与えている。しかし今日の基準からは花、果実、種子、そして自生地が考慮されていないが当時としてはラプラタ国産出の良く知られたカクタスを分類するには十分であった、特に考慮すべきことは *E.gibbosus* に対するコメントと *E.denudatus* に分類されない事が重要であった。

1897年：新設の命名法委員会で、*E.hyptiacanthus* と *E.multiflorus* の相違点が論じられた、その時の会議記録係りのヒルシュト氏 (Karl Hirscht) は、*E.hyptiacanthus* は既に栽培され、目録に取り上げられていると答えている事が記録されている。すなわちこの種は良く知られていて、同定に異論はなかつ

た。

1898年：シューマン氏が *Gesamtbeschreibung der Kakteen*(カクタスの総合学術記載)の中で、初めてこの種の挿絵を示した。(註：シューマン氏は彼自身の学術記載を行っている、原記載に近いが、いくつかの点で補足されている、特に中刺が0本から1本、又詳しい花の記載が行われ花色は黄色っぽい白と記載している。しかし果実と種子に対する記載はない。参考文献に挙げているのがルメール氏の *E.hyptiacanthus*、フーカー氏 (Hooker) の *E.Leeanus*、ヒルドマン氏 (Hildmann) の *E.multiflorus* (フーカー氏の記載した種ではない) でこれらの種は全て同一と彼は見做していた：最後に挙げられた種は、ティル氏達の論文で、カクタス販売業者、ヒルドマン氏が *E.hyptiacanthus Lem.*を *E.multiflorus Hook.*として販売したので、若干の混乱を示した、命名法委員会 (1897年) は、*E.multiflorus hort.*は *E.hyptiacanthus* と同一視できるというコメントを出したと記載されている事情を反映している。)

シューマン氏は地理的分布として『ウルグアイを挙げ、種子は1840年ツイーディ氏 (Tweedie) により、ロンドン近くのハンマースミス (Hammersmith) のリー氏 (Lee) 宛に送られた。』と記している。従ってツイーディ氏が種子をハンマースミスのリー氏に送ったのは1839年のレマイル氏の学術記載の後で、レマイル氏の記載した個体とは明らかに異なる。シューマン氏の論文に初めて登場するこの種の素晴らしい描画は、当時 *E.hyptiacanthus* で流通していた植物に基づいて描かれたと考えられる。刺が比較的強く、ルメール氏の“刺は非常に弱い”という記載に合っていない。また1842年発行された *Curtis's Botanical Magazine* に Hooker 氏本人が記載した *Echinocactus Leeanus* が載っている。(写真1) 其処には、花が咲いた、小さな植物の色つきの描画も載せられている。花は花被の内側が白で描かれている。描かれた花からはウルガイエンセ系ともシャツリアナム系とも考えられる、其処に記載されている説明文に『ハンマースミス (Hanmmersmith) 栽培場のリー氏 (Lee) 達により、アルゼンチンの州、ブエノス・アイレスからツイーディ氏 (Tweedie) により1840年に送られた種子から育てられた。描かれたのはキュー植物園で育てられていたものである。』とある。特にウルグアイから送られたとは記載されていない。シューマン氏は *E.hyptiacanthus* と *E.Leeanus* が同じと考えていたので、ツイーディ氏の話を書いたと考えられるが、しかし *E.Leeanus* の描画と *E.hyptiacanthus* の描画はあまり似ていないとは思えない。ティル氏とアンメルハウザー氏は、『*E.hyptiacanthus* の学術記載以来、大抵の重要な著者達により、持続的にこの種について報告されてきた。だから今日全ての定評のあるコレクション中のリストにはその種が見出される。この事は不思議ではない。何故なら我々が既にフィファー博士 (L.Pfeiffer) について良く知っているように、全ての大きなコレクション所有者たちは互いに良く接触し、彼らの間での活発な植物交換が行き渡っていたからである。』と述べている。(註：ルメール氏が *E.hyptiacanthus* として記載した、モンビル氏所有の植物が複数個あったかは不明 (計測値が一つしか報告されていない事は、一つしか存在しなかった可能性が高いが、ルメール氏がモンビル氏から1個譲り受けて記載した事も想定される。モンビル氏の所に1個しか存在しなかった場合、栄養生殖での増殖しかないので、広範囲の普及は難しい事になる。後に類似の植物が輸入され、それらからの種子での増殖

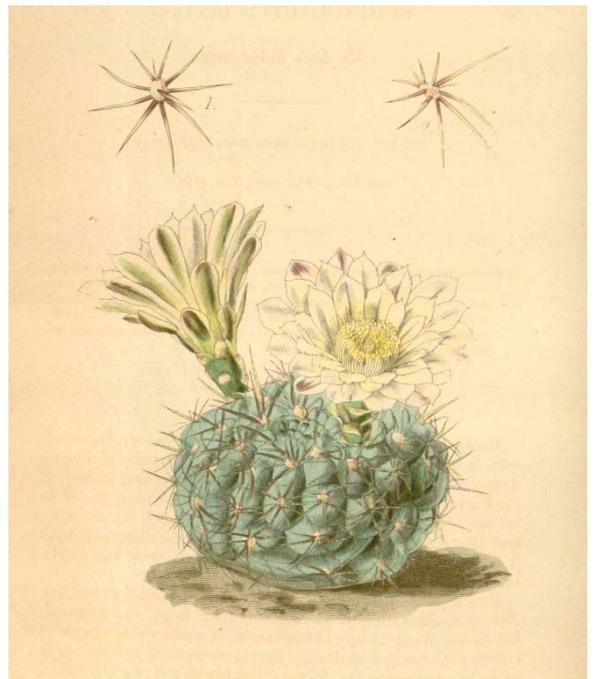


写真1: Hooker 氏の *E.Leeanus* Hook Curtis's Botanical Magazine 1842 より

や、栄養生殖によりコレクション中に広範囲に流通したと考えられる。その場合、原記載の **E.hyptiacanthus** と同じ植物ではない可能性も存在する。それがシューマン氏の総合学術記載の挿絵で示された植物とすれば、この植物は原記載された **E.hyptiacanthus** ではなくなる。

シューマン氏を話題にした後ティル氏とアンメルハウザー氏は文献中に現れた **E.hyptiacanthus** 関連の記事を解説する。

1841年：Burghart氏、1843年：Walpes氏、これらは既に記述、1846年：フェルスター氏（Förster）はルメール氏の記載を幾分短くして繰り返した。1849年：ダイク氏（Salm-Dyck）は花筒が短いと記載した *Hybogonii* 属の中に **E.hyptiacanthus** を記載しつつ、花筒は少し長いと記載した。1853年：ラポール氏（J.Labouret）は花が白い、**E. monvillei** Lem.に似ている述べ、更に3つの変種（var. **eleutheracanthus**、var. **nitidus**、var. **megalothelos**）を登録した。この事から、『ラポール氏の時代は **E.hyptiacanthus** は良く知られていた。』とティル氏達は推測している。

1868年：ロンドンとパリに支店を持つヨーロッパの外国産植物取引業者プフェルスドルフ（Charles Pfersdorf）がその頃良く知られていたエキノカクタス、今日の意味でのギムノカリキウム属を提供していた。その中には **E.hyptiacanthus** もあった。



Echinocactus hyptiacanthus Lem.
Tafel 164.

写真2: Schumann氏のGesamtbeschreibung der Kakteenに描かれた **E.hyptiacanthus**

レモン色の花を咲かせるウルグアイ産エキノカクタスに対して **E.hyptiacanthus var. citriflorus** を記載した。それは我々が **E.netrelianus** Monv ex Labouret (1853)として知っているウルグアイ産エキノカクタス一族の過渡形態である。(写真3と4) (註：ティル氏達は **G.leeaanum** を **G.reductum** の一形態と見るパプシュ氏とは異なり白い花の咲く広義のウルガイエンセの一族と見ている。)

1907年：チュービンゲン大学の植物園の監督官シューレ氏（Ernst Schelle）は **E.hyptiacanthus** は長

1886年：フェルスター—リュンプラー（Förster-Rümppler）の本（註：Carl Friedrich Förster氏の著作した *Handbuch der Kakteenkunde* (カクタス学のためのハンドブック)を Theodor Rümppler氏が1846年創設された新しい属や新たに輸入された種により増補して1886年に改訂したもの）には **E.hyptiacanthus** が、その変種と共に載せられている、そして短く記載されている。花は白っぽい黄色。(註：この本では変種の著者はラポール氏ではなくモンビル氏になっている。)

1898年：シューマン氏がカクタスの総合学術記載を著し、詳細な挿絵も提供された。当時、写真は珍しく、図は殆ど挿絵で提供された。(写真2) シューマン氏は **E.Leeanus** Hook.を **E.hyptiacanthus** の異名と考えていた、彼は恐らく外観の類似性のため当時のウルグアイ産のギムノカリキウム種を **E.hyptiacanthus** の品種(形態)だと思っていたらしい。

1902年：フリック氏（A.V.Fric）はシューマン氏と異なり、**E.hyptiacanthus** と **E.Leeanus** を分離し、ともに白からクリーム色の花と認識した。その結果、

い白い花を持つと記載した。後に(1926年)写真画像を発表した。ティル氏達はこの画像は、15年後の1941年に記載された。『*Gymnocalycium schroederianum* Osten を想起させる。』と述べている。(写真5)

1928年：クッパー氏 (Walter Kupper) は *E.hyptiacanthus* を既にギムノカリキュームとして取り扱っていた。彼の画像(写真)は以前から知られているこの種の形態を示している。(註：比較的刺は細いが真っ直ぐ、左右に各3本、上に2本、下に1本。) 残念ながら花は無いが、クッパー氏は『勤勉に花を咲かせる、白い花を持っている。成長した個体は直径8cmに到達し得る。』と述べている。



写真3：Till氏の意味での *G.leanum* HT 472
Schlosser氏からの輸入品、AGG誌898; 2010

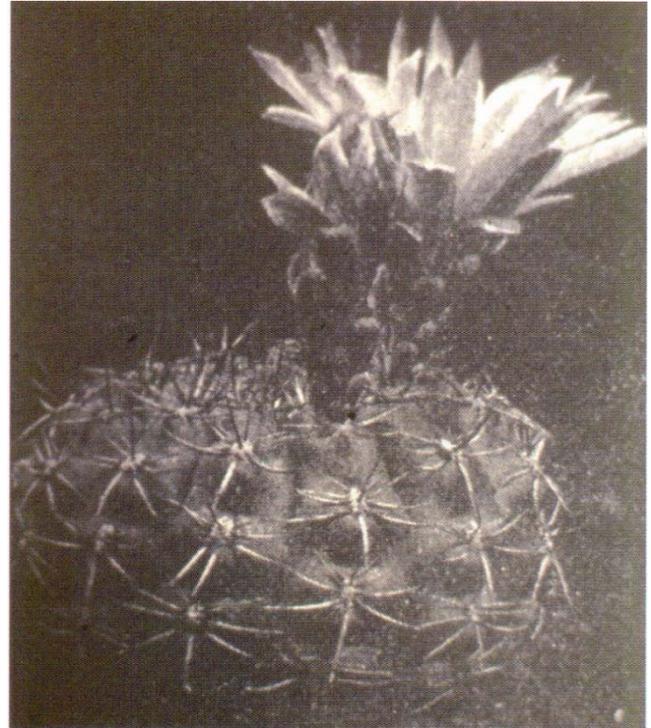


写真4：1926年のSchelle氏により複写された
E.hyptiacanthus、AGG誌900; 2010



写真5：未記載の *G.leanum* var. *citriflorum*
HT416 Schlosser氏からの輸入品、AGG誌
899; 2010

1939年：ホッセアス氏 (Curt Hosseus) は *E.hyptiacanthus* を知らなかった。彼はツイーディ氏が1840年ウルガイ産の種子から育てた *E.hyptiacanthus* の苗をロンドン近郷のハンマースミス栽培場のリー氏に送ったと記述している。この植物の場合、*E.hyptiacanthus* が問題になっている事は絶対に無い。何故なら既に1939年ルメール氏により記載されていたから。

1959年：同じように *G.hyptiacanthum* の種を自らは知っていなかったバックハーグ氏 (Curt Backeberg) は多くの著者を引用して、多くのことを書いている、しかし若干の報告は疑った。(註：種の説明文の所にはシューマン氏の学術記載(それはシューレ氏の記載と合致する)としてそのまま引用

している。3個の脚注があり。脚注の1はKaktus-ABC(1935)での *G.platense hyptiacanthum* (Lem.) Backebg.は間違った組み合わせ。脚注の2はシューマン氏の挿絵は恐らくこの種では無くて *G.leanum* v.

netrelianum であるだろう。脚注の 3 は図版 118 のボッシング氏の植物が正しい *G.hyptiacanthum* だろう。(図 7)

1973 年 : *G.hyptiacanthum* に関する重要な出版物としてクラインツ氏 (Krainz) の本 “Die Kakteen” 中にフランク氏 (G. Frank) による記載を利用できる。フランク氏は *G.leeaanum* と *G.hyptiacanthum* は一つの同じ種であるとして、シューマン氏と見解を共有していたから、新しい学術記載が問題になっていたとしても受け入れる事は出来ない。続くフランク氏の註釈の場合、1973 年の知識水準も注意を払わねばならない、その中で彼は *G.hyptiacanthum* は *E.Gibbosus* に似ているという、誤ったルメール氏の註釈を次へ送った。(註 : フランク氏の文献では、最初にルメール氏のラテン語の部分がそのまま引用されている、その後、『花は頂点付近から、長さ 45-50mm、漏斗形状、子房は緑色、緑色の鱗片が備わっている、外花弁は長く、緑色、中筋は青っぽい、縁は灰白色、内花弁はへら形状、灰白色から黄色を帯びた白色まで、花糸は灰白色、葯は黄色、花柱は灰白色、柱頭裂片は灰白色、果実は球形から卵形まで、直径約 10mm、緑色、花が付着している、半円形状で青緑色の鱗片が付いている、種子は 1mm から 1.5mm、やや球形、ハイラムは底面に、幅広の楕円形、酒杯は鈍い黒色、粒粒がある、多かれ少なかれ仮種皮皮膜で覆われている。』という花の判別文 (Diagnose) が記載されている。ティル氏達の言う新しい学術記載とはこの花の部分を目指していると思われる。) フランク氏の註釈は少し長いが、そのまま引用すると『ルメール氏は、この種について、自生地も、花も果実も知らなかったから、その種はしばしば、不確かな種として理解された。その種は *Echinocactus gibbosus* (*Gymnocalycium gibbosum*) に似ていると言う、著者の註釈と外観で原学術記載に合致する、名声の高い特別なコレクションに由来する古い *G.hyptiacanthum*、は一貫して、ある画一的な基準標本を意味していた事実は、当時、ルメール氏が *Gymnocalycium gibbosum* 形態集合からのある種を、*Echinocactus hyptiacanthus* として当時、記載したという推論の余地を残した。シューマン

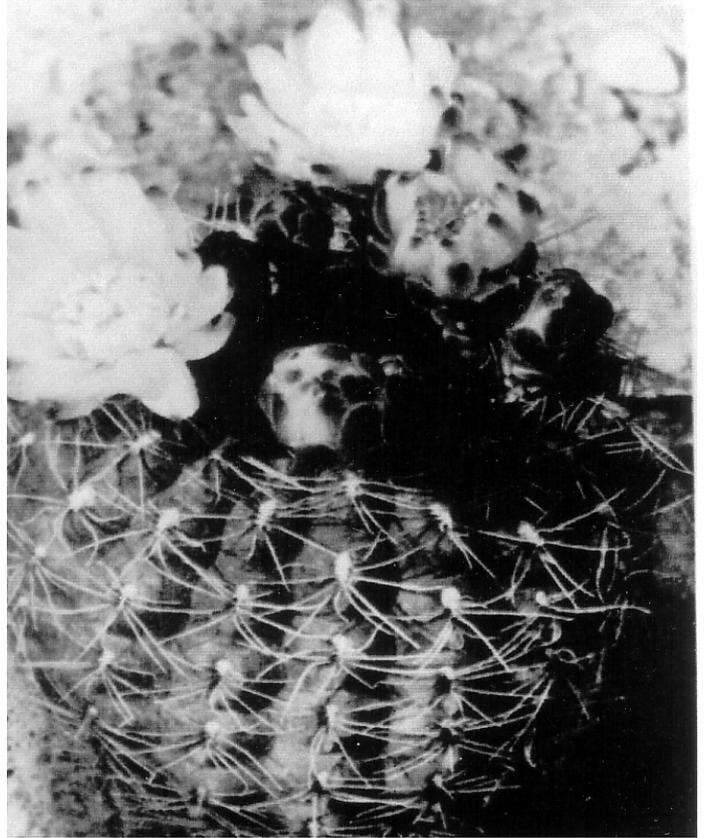


図 6 : Cactaceae III の挿絵 1673 番、*G.hyptiacanthum*、モナコのザントナー氏 (Zanntner) のコレクションに由来するタイプ : *G.hyptiacanthum* sensu Vaupel (ヴァウペルの意味での *G.hyptiacanthum*) (著者註 ; 刺は細く、幾分曲がっていて乱雑の配置)

BACKEBERG, Die Cactaceae, Band III

Tafel 118



図 7 : Cactaceae III の図版 118 : ボッシング氏 (Franz Bozsing) のコレクションにある *G.hyptiacanthum* (著者註 : 刺は比較的太い、中刺がある)

氏(Gesamtbeschr. Kakt. 1898, 403 頁と写真)ギュルケ氏 (M. Gürke) (Blühende Kakt. III、1921、図版 164)、そしてシェーレ氏 (E. Schelle) (Kakteen 1926, 225 頁と写真 117) 及び、他の著者達も、何の理由も無く、自生地にウルガイを挙げている。それ故に、恐らくシューマン氏は(上記引用文献)花を黄白色と表示した、そしてウルガイ原産の *Gymnocalycium leeanum* を *G.hyptiacanthum* と定めたのだろう。今日では、花の色における微妙な差異は、全く種の兆候 (Artindiz) を意味しない事を我々は知っている。それは別として、南アルゼンチン産の、最新の *G.gibbosum* の輸入品の場合、時々、蒼白い黄色の花の色も、出現する。その花の特徴と、種子の特徴に拠れば、*G.hyptiacanthum*、は疑問の余地無く、同じく *G.gibbosum* 形態集合に属している。そして、分布は、恐らく、どちらかと言うと、ウルグアイよりもアルゼンチンにあるとしてよいだろう。ウルグアイでは、*G.leeanum*、*G.netrelianum* そして *G.uruguayense* のような、小さな、黄色い花を咲かせる種が生息する。』従って、フランク氏は必ずしもシューマン氏と同じ見解ではない、種子の特徴から *G.gibbosum* の一形態と見ている。ウルグアイ産の *G.schroederianum* も種子の特徴は亜属 *Gymnocalycium* に属している点で、フランク氏の註釈は興味深い。

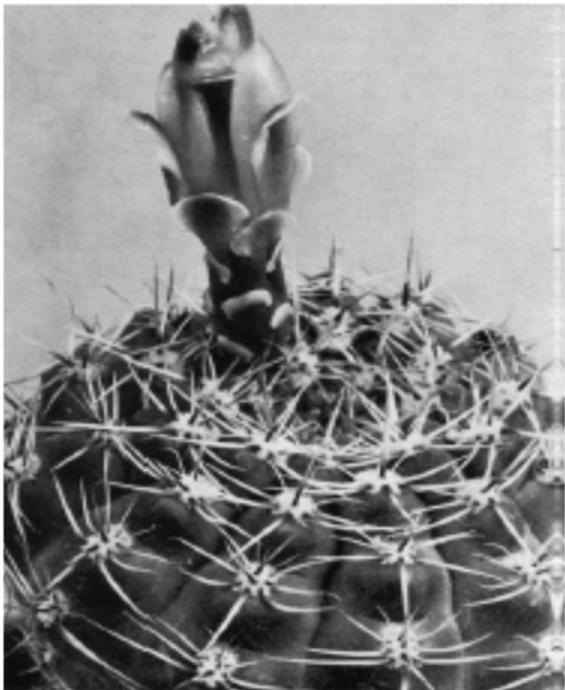
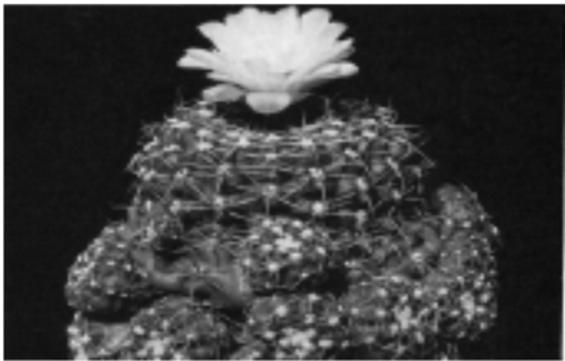


図 8 : Die Kakteen1975 の 2 枚の写真

えされている。そして写真の説明文には“最初の写真は 40 年以上のものを示している。二番目の写真はチューリッヒの国立・多肉植物コレクションに由来する、同じ植物の接木された側芽。写真は F. Krainz (Fk.)』と記されている。

続けてティル氏達は述べる。『フランク氏は、彼の修正後、つまり 1974 年シュロッサー氏 (Hugo Schlosser)

ティル氏達の論文に戻ると、彼らは以下のように記述する。『加えて、フランク氏の論文の終わりのクライツ氏の註釈は興味深い。その中で彼は、*G.hyptiacanthum* を *G.netrelianum* や *G.leeanum* と関連付けるべきでないと明言する、そして彼の見解に基づいた *G.hyptiacanthum* を表現している 2 枚の挿絵を指示している。』(図 8)

これは、添付された写真に添えられたクライツ氏の註釈で以下のように記載されている。『それはそうと、ルメール氏により選択された名前は、鉤爪形状の、上方に向う、中刺を持つ、此処に写真に写された植物にも該当する。今日の、我々の見解に拠れば、*G.hyptiacanthum* は不十分な学術記載で、それゆえ、しばしば疑わしい種として解釈された、例えば、バッケバーク氏、(図 6、Die Cactaceae III、1738 頁と写真 1673) それにも拘らず、それは此処に引用される。何故なら、全ての事が、写真に写された植物はルメール氏の学術記載に基礎を置いている事を、物語っているから。今後は、若干のギムノカリキウム・コレクションの中に出現する、この基準標本の果実と種子の補足された学術記載により、それは、疑問の余地無く、明確に *G.hyptiacanthum* の名前と結び付けられるだろう。それ故、とりわけ、最近、ウルグアイ産の輸入植物が再び、*G.hyptiacanthum* の名前で市場に出ているから、明らかにシューマン氏の間違いは繰り返

が現在 *G.schroederianum* と呼んでいる *G.hyptiacanthum* をウルグアイ南西部で再発見した事も知る事が出来なかった、それにより数十年来描写されてきたような *E.hyptiacanthus* のウルグアイでの出現を証明する事が出来る。』ティル氏は、シュロッサー氏のこの採取品 (HT416) やブイニング氏 (A. Buining) の

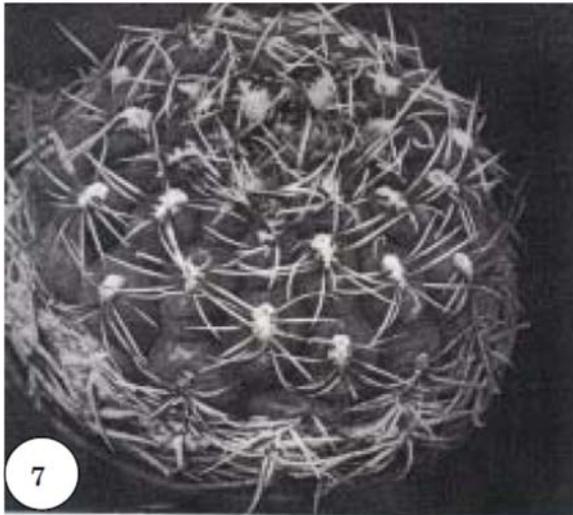


図 9 : *G.hyptiacanthum* Schl.136 Colonia KuaS 1982(33)4 : 90

採取植物 (HT1000) を所有している。このほか、第三の形態として、オーストリアのシモ博士 (Dr. A. Simo) から譲られたラウシュ氏 (W. Rausch) の採取品も所有していたが、これは枯れたので、比較として参照する事が出来なかった。これらの植物が花の後、亜属 *Gymnocalycium* の種子を持つ、熟した果実付けた時、ティル氏は少しも驚かなかった。

1982 年 : シュロッサー氏とシュッツ氏は“ウルグアイのギムノカリキュム”について報告した、彼らはとりわけ *G.hyptiacanthum* を取り扱った。その際、本文を執筆したシュッツ氏はフリック氏の観点に優位を与えた。(註 : 先にこの論文の中身は簡単に紹介した、ウルグアイの 3 つの種、*G.uruguayense*、*G.hyptiacanthum*、そして

G.schroederianum を扱い、*G.hyptiacanthum* は *G.schroederianum* とは異なる種としている。フリック氏は *G.leeanum* と *G.hyptiacanthum* を分離した、ここでの *G.leeanum* はティル氏にとっては *G.uruguayense* の一形態だから、このように述べている。) 90 頁 (註 : KuaS の論文の) に載せられた 6 枚の画像は、どれも *E.hyptiacanthus* の学術描写に正確には一致しない、しかし左上の画像 1 (註 : KuaS の論文では 7 番(図 9)) は基準標本として最もよく似ていると言える。撮影された植物の発見場所は“Colonia Dept. Cerro Piedras de Afilar、海岸近く”と申告されているこの際、間違いあるいは誤植が



図 10 : *G.hyptiacanthum* Sch-136 KuaS 1982 (33) 2 : 28



図 11 : *G.hyptiacanthum* Sch-126 Net から

問題となっている、それは Sch-126 と言わねばならない。シュロッサー氏は当時第一著者に Sch-136 の発見場所として“Rosario から Cardona へ向かう Ruta II で”伝えた。6 枚の画像は昔の *G.hyptiacanthum* あるいは *G.schroederianum* と関連付ける事は出来ない。(註：実際の KuaS の論文では、以下のように記述されている。；『大きな変異性の例としてフィールド番号 Schl.136(図 10)を挙げる事が出来る、それは Colonia 地区の町 Rosario 近くで発見された。この生息地では長くて、真っ直ぐで、かなり細い灰色の刺を持つ個体例を見出す。それに対して他の個体例も見つかる、その場合、刺は短く頑丈で力強く、曲がっている。同時に刺の赤い基部も直刺の個体例の場合よりも強く発達している。 *Gymnocalycium hyptiacanthum* の学術記載にはフィールド番号 Schl.126(図 11)の個体例が最も良く一致する。それは Cerro Piedras de Afilar で見つかった、即ち海岸の近くである。』従ってティル氏の文章には多少誤解がある。)

クラインツ氏の見解をスラバ博士 (Dr. Rudolf Slaba) も『*G.hyptiacanthum* (Lem.) Britton & Rose は決して *G.leanum* 類縁関係 (註：ティル氏の意味では *G.uruguayense*) グループに属する植物)ではない。胴体から突き出さない、胴体に隣接する縁刺と、1 本の胴体に垂直に立っている中刺を持つ幅広い球形の胴体により異なる、それらの特徴は変種から種までのレベルの評価に値する。残念なのは我々が発見場所を知らないだけである。』と述べて支持した。

注目されることは、大きな種子を持つ種、すなわち亜属 *Macrosemineum* だけを推測していただろうリ



図 12 : *Gymnocalycium schroederianum* Schl. 137
発見場所で、KuaS 33(4) 1982: 88-91

オ・ウルグアイ河の両側の地域で繰り返し亜属 *Gymnocalycium* に属する個体群が繰り返し発見されていた事である。20 世紀の 60 年代の中頃、ブイニング氏 (Albert Buining) がティル氏を初めて訪問した時、彼には未知で、刺の状態が変化に富むギムノカリキュームの輸入植物を 8 個持参した、同定の助けになってほしくて持参した。ブイニング氏当時ホルスト氏 (Leopoldo Horst) と一緒に南ブラジルからウルグアイへ寄り道をした、その際ウルグアイからアルゼンチンへの国境の小さな河の近くでこの未知の植物を派遣した。ティル氏の所蔵品と比較した場合 *G.hyptiacanthum* との確実な類似性を確認できた。けれども花の情報無しでは完全に正確な決定は出来なかった。分布調査で、東で発見された *G.schroederianum* の拡大された生息域でその植物が存在している事がますます明らかになった。それで、ブイニング氏はティル氏の所に 5 個の植物を預けて、『私はあなたにこの植物を委ねる、そして再びあなたの所を訪ねる時、その時はそれらについて確実にもっと知っているだろう。』と言った。彼の次の訪問の際、この植物は既に開花して、ティル氏のコレクションの *G.hyptiacanthum* と呼んでい

る植物との大きな類似性を示していた。ブイニング氏は *G.schroederianum* の学術記載を知っていて、その植物がその生息域に由来していたので、『恐らく *G.schroederianum* だろうと』と言った。(図 12)

1987年：キースリング博士が、スペガジーニ氏により学術記載された *G.platense* (Speg.) Britton & Rose と同様にその形態全てを *G.schroederianum* の亜種とした。それと同時にこの処置は、彼の意見に従うと、*G.hyptiacanthum* の同定が最早異論の余地なく立証され得ない事を根拠付ける。(註：シューマン氏の最初の挿絵以後、幾つかの文献の画像が *G.schroederianum* を暗示させていたが、アルゼンチン産の *G.platense* が *G.schroederianum* であればウルグアイ産と言われている *G.hyptiacanthum* は *G.schroederianum* と結び付けにくくなる。)

30年来集中的にギムノカリキューム種に取り組んできたティル氏はこの推論に同調する事は出来ない。何故なら彼には、1940年来この種は良く知られていたから。120年前から、ヨーロッパで、継続して栽培されていた *G.hyptiacanthum* はカクタス文献で繰り返し取り扱われてきたそして最後に、自然界でも再発見された。ティル氏は *G.hyptiacanthum* は *G.schroederianum* に類似の一つの分類群だと見做している、だから、現地の発見場所では栽培中と同様に異なる花喉色(緑色とピンク色)を持つ個体も観察されている。

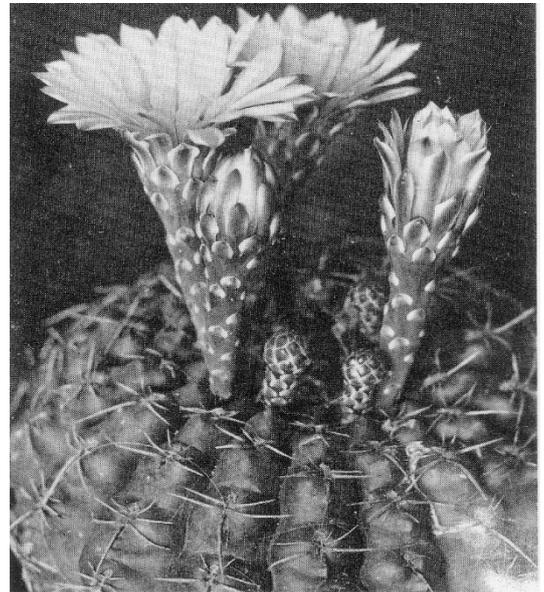


図 13 : *G.schroederianum* ssp. *bayense*
CSJ (US) Vol.59 No.2 1987:44-49

2001年：パプシュ氏 (W.Papsch) は上で名前を挙げられた *G.platense* を外観の類似性により *G.schroederianum* と関連付けている。それにも拘らず *G.platense* はどちらかと言うと *Gymnocalycium reductum* (Link) Pfeiff. ex Mittler に置く事が出来る。彼は論文の中で『*G.schroederianum* とその下種の学術記載は *E.platensis* の学術記載に対して、些細な相違点しか示さない。比較できる特徴においても、*E.hyptiacanthus* の初記載に対しても、切り離せるような視点は全く見つける事は出来ない。*E.hyptiacanthus* の学術記載された特徴は *E.platensis* そして *G.schroederianum* subsp. *bayense* のそれらと関連しているのです、これらの分類学種は、一つの種と考えられる。それに対して、最も古く適用された名前は *G.hyptiacanthum* である。』(註：Wolfgang Papsch 氏が 2001 年に *Gymnocalycium* 誌 385-392 頁に記載した論文『パンパ産のギムノカリキューム種、その(3) *Gymnocalycium hyptiacanthum* (Lemaire) Britton & Rose』を指す。)

G.hyptiacanthum と *G.platense* 及び *G.schroederianum* subsp. *bayense* の場合、共通の基礎形態から、二つの独立した進化をしたのだろう。(註：*G.platense* は 1896 年スペガジーニ氏により、*Ech. platensis* として *Contr. Fl. Ventana* 28,1896 で最初に記載されているので、もし *G.schroederianum* が *G.platense* と同じとしてもより古い *G.hyptiacanthum* の名前が有効になる。)

恐らく彼は間違った、何故なら彼は *G.hyptiacanthum* の発見者をツイーディ氏 (J.Tweedie) と判断していたから。ツイーディ氏は造園家で主にブエノス・アイレス州の海岸地域で採取した。(註：メレガリ氏の論文紹介の所でもふれたように、ツイーディ氏は *G.leanum* に関して関与したのであり、シューマン氏が *G.leanum* と *G.hyptiacanthum* を同じ種と考えたので、*G.leanum* が記載された論文の中にある、ツイーディ氏の件を彼の著書で引用した。従って、ツイーディ氏の件を議論する事はあまり重要ではないと思われる。)

ティル氏達は、*G.hyptiacanthum* の発見者をギリエス氏 (John Gillies)と判断して、彼らの推論を展開する。『ギリエス博士 (1792-1834) はスコットランド出身の医者で、植物収集家であった。1820年ブエノス・アイレスに行き 1823年から1828年までメンドーサに住んだ。オックスフォードには、およそ250個の標本館資料が存在する。(フィールディング・コレクション(Fielding Sammlung) OXF)、さらにはグラスゴウの Arnott 植物標本館 (G L) にも存在する。彼が病気のために英国に戻らねばならないときに、メンドーサから乗船までの帰り道は、彼の健康状態のために多くの行程が取られた。その事を彼は更に植物の収集に使った。(Clokie 氏、1964年) これらの収集資料 (Fielding Sammlung) に基づいて、彼の帰りの旅行ルートの大部分を確かめる事が出来る。;それはメンドーサからサン・ルイスを越えて、Cerro Morro、La Aguadita (Nonoの南)、そして Punta de Sauce (Rio Sauce 河沿い) からコルドバへ通じている。コルドバから、更に、Santa Fe、Gualeguay、そして Gualeguaychu(エントレ・リオス州)、すなわち *G.schroederianum* var. *paucicostatum* Kiesling (1987)の発見場所へと行った。英国への戻りの旅の前に、あらかじめブエノス・アイレスの代理人に送られた収集資料が積み込まれた。彼の、以前にブラジルで収集された標本館資料がフーカー (Hooker) 氏により彼の英国への旅の後になって初めて発表された事は彼の願望に違反していたために、フーカー氏との確実な不和が生じた。この事はギリエス氏がフーカー氏の代わりに、彼の資料の編纂者としてフランス人のルメール氏を優遇した原因となったとしても良いだろう。ギリエス氏は彼の発見した種を、ハワース氏 (Haworth) やルメール氏と一緒に “Iconografie descriptive des Cactees(カクタスを記述した図版)”、“Cactearum monographiae tentamen(カクタス科、専門研究の試み)”そして “Les Cactees, historie patrie etc(カクタス、歴史と分布等)”の中で発表している。(ティル氏達の推論の根拠) パプシュ氏 (Papsch) 氏の移動組み換え (Umkombination)、すなわち *G.schroederianum* を *G.hyptiacanthum* subsp. *schroederianum* (Osten) Papsch へそして変種 *paucicostatum* を *G.hyptiacanthum* subsp. *paucicostatum* (Kiesling) Papsch へは正しかった事を示している。』

ティル氏達が述べているようにパプシュ氏は2001年に “Gymnocalycium”誌に2つの論文を投稿し、*G.hyptiacanthum* と *G.leeaanum* について記述した。彼は *G.hyptiacanthum* の産地はブエノス・アイレス地方の Olavarria の南東部であり、スペガジーニ氏が記載した *G.platense* 及びキースリング氏が記載した *G.schroederianum* subsp. *bayense* は *G.hyptiacanthum* の異名であるとした。類縁種の *G.schroederianum* と *G.schroederianum* var. *paucicostatum* は古い記載を理由に *G.hyptiacanthum* の亜種として記載した。そして原記載の *G.leeaanum* はアルゼンチン産で *G.reductum* の亜種として学術記載した。そして *G.leeaanum* として流通している、ウルグアイ産の植物は *G.netrelianum* であるとした。パプシュ氏はシューマン氏の著作に影響されて、ルメール氏の *G.hyptiacanthum* の供給源はツイーディ氏であると考えた。ツイーディ氏は当時ブエノス・アイレス近辺でのみ採取していたから産地はブエノス・アイレス近辺とした。この推論からの結論であった。実際は、*G.leeaanum* の供給源がツイーディ氏であるから、彼が *G.leeaanum* を *G.reductum* に関連付けたのは正しい推察だった可能性は高い。ウルグアイ産の植物での *G.hyptiacanthum* のネオタイプ化を承認して後に、パプシュ氏はこの結論を訂正している。

キースリング氏のネオタイプ : (Kiesling, Cat. Pl. Vasc. Argentina; 444, 1999 als lectotipo) : ウルグアイ、フロリダ地区 (dept. Florida)、国道5号、Cerro Pelado, 1990年6月17日、キースリング氏とクロエンレイニ氏 (Kroenlein) が採取、登録番号8505 (SI) (図17)はSIにある。Kiesling氏による標本館資料は *G.leeaanum* に類縁の植物に関連がある。だから *G.hyptiacanthum* としては受け入れられない。発見地の地域は “Dept. Florida” と “Dept. Colonia”は相互に遠く離れて位置するとは思えない、何故なら2つの地域はウルグアイの南西部にある。其処では大きな種子を持つギムノカリキウム種

(*Macrosemineum Schütz*) のみに出会う。(註：“Dept. Colonia”は Schl.136 の発見場所に相当する、Schl.136 は KuaS の論文では *G.hyptiacanthum* の中で大きな変異性の例として挙げられている個体である。KuaS の論文では *G.hyptiacanthum* は *Macrosemineum* の種と考えているので、特に矛盾は無い。)

『最後に、もう一つの移動組み合わせが書き留められねばならない。その中では Graham Charles 氏と Massimo Meregalli 氏が(2008 年)*G.uruguayense* と *G.netrelianum* を (両者とも種子グループ *Macrosemineum*)、Kiesling 氏の移動組み合わせを根拠に、二つとも *G.hyptiacanthum*(種子グループ *Gymnocalycium*)の亜種とした、その際彼らは *G.hyptiacanthum* subsp. *netrelianum* に対してネオタイプを作成した。』

ティル氏達はギリエス氏が英国に帰る途中に採取した、そのルートから *G.schroederianum* の産地に近い、アルゼンチンとウルグアイの国境付近が採取した試料の産地であると推論した。ギリエス氏は試料を英国人のフーカー氏よりも、より親しかったフランス人のルメール氏がいるフランスに送った。それがモンビル氏のコレクションに納まった。それをルメール氏が *G.hyptiacanthum* として学術記載したという推論を導いている。そしてルメール氏の学術記載以降、その種は、多少の混乱もあったがヨーロッパのコレクション中で保存、維持された、その種は古い文献中の挿絵や写真からも現在 *G.schroederianum* で流通している分類学種に近いと言うのがティル氏達の主張である。

ティル氏達の主張に一理はあるが、原記載中には、挿絵が無いし、重要な花と種子の記述が無いので、また、その後コレクション中で保存された *G.hyptiacanthum* と称される植物が、原記載中の植物との直接の繋がりを明確に判断するのは難しい。ルメール氏により記載された個体は 1 個だったことは記述の中身から想像されるが、しかしギリエス氏が 1 個だけを採取したとは考えにくいし、モンビル氏のコレクション中には複数個存在した可能性は否定できないから、それらの個体の子孫がヨーロッパのコレクション中に拡大し、保存維持された事も完全には否定できない。またルメール氏の記載には側芽の話が無い、ウルグアイエンセ系の植物は原掲載中に記載された個体サイズなら側芽を出してもよい大きさである。一方 *G.schroederianum* は私の経験では比較的側芽を出さない。この事を考慮すると、初記載の *G.hyptiacanthum* は *G.uruguayense* 系でなくて *G.schroederianum* 系の可能性があり、ティル氏達の主張には有利な点である事を指摘しておく。

メレガリ氏の主張も、ティル氏達の主張もそれぞれ、幾分かは説得力があるが、国際植物命名規約(ICBN)に明確に違反していない限り、名前の正当性の白黒を判断する国際機関は存在しない。ハント氏、メレガリ氏、ティル氏達の見解のいずれを支持するかは、個々の学者や趣味家に委ねられている。

雪冠玉、日本での歴史的記録

此処からは、話題を転じて、日本での *G.hyptiacanthum*(雪冠玉)の歴史を文献の中から調べてみた。

E.hyptiacanthus の和名は誰が命名したかは不明であるが、それは「雪冠玉」である、少し本題から外れるが、和名について一言、サボテンの普及については、学名よりも和名の方が親しみやすく、大いに貢献している事は否定できないが、一つの学名の種に対して、変異性があり、ある学名で輸入された一つのタイプの個体に、和名が与えられてその時のイメージで、和名とタイプが固定される事が多い、その後同じ学名の別のタイプが新たに輸入された時に、ある種の混乱が生じる事も多い、また、後の研究で学名が変更された場合、それに応じて和名を変更する事の難しさから、私は、和名を付ける事には否定的な見解である。最近生じたギムノカリキウム属での後者の一例は怪竜丸(以前は *G.bodenbenderianum* に対して与えられた名前)である、これは最近 *G.basiatrum* の学名に対応させるのが相応しい。そして本当の *G.bodenbenderianum* に対応するのは、以前 *G.riojense* と呼ばれていた植物に対応する。(*G.riojense* は

より新しい名前なので、植物命名規約により古い名前が優先されるため)、しかしコレクターの所蔵品や、業者の中では、以前の名前で所持され、販売されているため、混乱状態にある。和名が無ければ、恐らく混乱の程度は少ないだろう。話題からの脱線を終了し、本題の *G.hyptiacanthum* に戻ると、*G.hyptiacanthum* に和名“雪冠玉”を付けた人について私には情報が無い。私が

41 (2015)	GYMNOCALYCIUM curvispinum Catamarca	10'—	
42 (2018)	G. curvispinum Portozuolo.	10'—	
43 (2018b)	G. Delaetii.	10'—	
44 (16)	G. denudatum v. Anisitzii	5'—	35'—
	Weissbl. mit rosa Schlund.		
45 (18a)	G. gibbosum v. caespitosa	4'—	28'—
46 (18b)	G. gibbosum caesp. cristata.	10'—	
47 (18c)	G. gibbosum v. hyptiacantha.	5'—	35'—
48 (18d)	G. gibbosum v. ferox	6'—	42'—
49 (18e)	G. gibb. ferox cristata	10'—	
50 (18f)	G. gibbosum v. leonense	10'—	
51 (18k)	G. gibbosum reductum	6'—	42'—
		100 Korn	1000 Korn
52 (18h)	G. gibbosum Schlumbergerii	5'—	35'—
53 (19i)	G. gibb. Schlumb. cristata	10'—	
54 (18l)	G. gibbosum alle Sorten.	4'—	28'—
55 (2019)	G. sp. Guanchin, sp. n.	10'—	
56 (2020)	G. horizonthalonium, Frič sp. n.	8'—	56'—
	ECH. loricator-G. Spegazzini? Winterhart.		
57 (21)	G. Knebelii, Frič sp. n.	5'—	35'—
58	G. leanum	10'—	
	gelbblühender denudatus.		
59 (19)	G. Mihanovichii f. stenogona	10'—	70'—
	Unsere beliebte Mihanovichii-Stämmen alle von zwölf Exemplaren, die ich 1903 aus Paraguay mitgebracht habe, sind aber alle schon hybridisiert. In der Heimat sind durch Überschwemmung ausgestorben. 1000 km südlicher fand ich jetzt neuen reinrassigen Mih. mit schmäleren Rippen und biete Samen aus Importpfl. an.		
60 (19a)	G. Mihanovichii hies. Ernte	5'—	35'—
61 (20)	G. michóga, Frič sp. n.	3'—	21'—
	buntkörp. wie vorherige aber stark bestachelt.		
62 (2021)	G. Mostii	3'—	21'—
	Härteste Gymnc.		
63 (2022)	G. Netrelianum.	10'—	
	citrongelbl. denudatus.		
64 (2023)	G. nidulans, Frič sp. n.	10'—	70'—
	Nestartig best. In wenigen Exempl. imp.		
65 (2024)	G. occultum, Frič sp. n.	3'—	21'—
	Interes. Samenform. Zweijährig blüht.		
66	G. occultum fl. rosea	8'—	
67	G. Riojense, Frič sp. n.	5'—	
68 (2025)	G. saglione	3'—	21'—
	beliebteste Slge, ersters Jahr langsam wachsend.		
69 (2026)	G. saglione v. longisp.	5'—	35'—
70 (2027)	G. Stückertii, Speg. (Ech. Jossen-sianus?)	5'—	35'—
	willigste Blüher, bis 30 Bl. auf einer Pfl.		
71	G. Uruguayense fl. rosea, rech.	15'—	—'—
72 (2029)	G. Venturii, Frič	15'—	—'—
	purpurrot blühende denudatus. <small>Samlinge abg.</small>		

図 1: Frič の 1929 年のカタログに載った *G.gibbosum* var. *hyptiacanthum*, 1936 のカタログには *hort.* とあるので、Frič は園芸種と考えていた。



写真 14: 光兆園の冊子 1936 年 5 月号に載った *G.hyptiacanthum* の写真

使える古い文献を探すと 1932 年頃関西にあったサボテン業者「光兆園」が園の雑誌を発行していた、1932 年から 1937 年分が、大阪の山城愛仙園に保管されている。この冊子の 1936 年 5 月号に新種として、*Gymnocalycium hyptiacanthum* が「ヒプチアカンサム」として紹介された。(写真 14) その説明文は:『有名な、かの多花玉に最も近くて美しい、初夏になると、美しい白い花を良く着けるので喜ばれる、産地は南米ウルグアイが付いている。』とあるので、この時点では和名が無かったと思われる。(註: 下線は著者による)

1933 年シャボテン誌に有名な津田宗直氏がギムノカリキュームの解説記事を書いています。その中に、*G.gibbosum* var. *hyptiacanthum* が記載されています。詳しい事は書かれていませんが、ただ曲刺変種とだけ記載されています。*G.gibbosum* var. *hyptiacanthum* は山名氏がサボテン日本に記載した学名・和名対照表には Frič 氏が記載した名前と和名は竜冠となつています。

現在の対照表では、雪冠玉と同じく *G.hyptiacanthum* の和名とされています。

Fric 氏のカタログは入手していますが、詳細は不明です(図 1)。元々の *G.hyptiacanthum* だったものを当時の欧州で出回っていた、形状を見て、*G.gibbosum* に似ていると思った、Fric 氏が新たに命名し直した可能性は否定できません。何故なら、欧州から入った *G.hyptiacanthum* には、*G.gibbosum* に似たタイプ、より正確に言えば現在 *G.schatzlium* で輸入されている植物に類似しています。私がウーリッヒから輸入した植物は、まさにこのタイプの *G.hyptiacanthum* でした。ただチェコ人の Fric 氏は学者と言うよりは、業者に近い人物で、自分で採取した新種を詳しく記載することなく自身の販売カタログに名前を載せていた事が多い。従って学名として採用されている物は少ない。

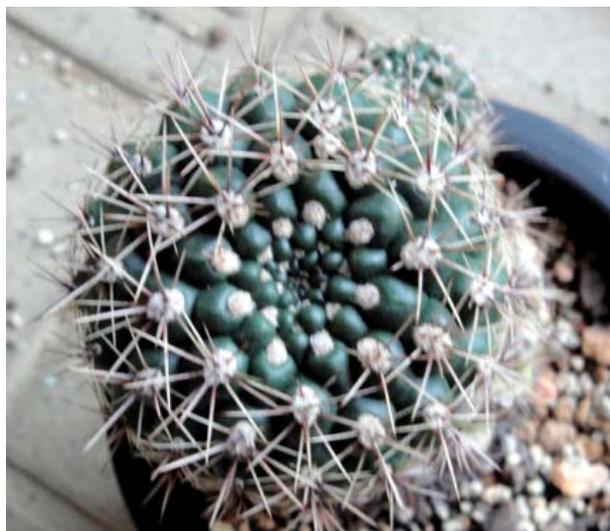


写真 15: Uhlig からから *G.hyptiacanthum* とし輸入した *G.schatzlium*



写真 16 : *G.schatzlium*

時代は下って 1961 年の雑誌サボテン日本 (Succularum Japonica) ギムノカリキウム属特集が載せられている。その中に山名利三郎氏に拠る、[ギムノの分類と品種]と題する文章に、雪冠玉 (*G.hyptiacanthum*) とあるので、この時点では既に和名が存在していた事が分かる。解説文は「九紋竜変種の竜冠と同一物と思われる、宝卵玉、*deeszianum* (和名：月冠玉：山名氏命名) 等に類似しているが九紋竜に近い光竜丸 (*G.platense*) 系である。産地はウルグアイ」とある。(註：下線は著者による)

この雑誌の同じ号に奥一氏による「ギムノがギムノと呼ばれるまで」、一日本におけるギムノの歴史」と題する一文がある。その中で『大正 12 年 (1922 年) 3 月、松園信淳氏が東京農大の卒論に“仙人掌に就いて”を書いた。彼は大正 3 年 (1913 年) 頃からサボテン栽培を始め、最初は松沢進之助から買っていたが後には自身でドイツから直接輸入した。』と、紹介されている。論文の最後に彼の栽培品リストがつけられていて、その中に *Echinocactus hyptiacanthus* も載っている事が確認できる。

恐らく、これが日本に最初にドイツから輸入された後の *G.hyptiacanthum* である。(註：下線は著者によ



写真 17: 山城愛仙園で売られていて、入手した *G.gibbosum* var. *hyptiacanthum*、単なる *G.gibbosum* と思われる。

る)この植物について、どのような事が記載されているかは、松園信淳氏の論文を見ていないので不明である。当時和名が付いた、古くに輸入されたものは、学名と和名の対照がなされているとあるが、恐らくこの種は当時、和名は付けられていなかったと思われる。これらの松園信淳氏のコレクション中に在った植物は恐らく太平洋戦争の混乱の中で失われたと想像される。日本に最初に導入された時期と場所から、ヨーロッパで、この種を巡って混乱していた時期（註：ヨーロッパで *G.hyptiacanthum* が一つのタイプとして確定したのは 1982 年の KuaS 論文以降と考えられるから）の植物が導入されたと考えられる、本来の *G.hyptiacanthum* では無く、*G.monvillei* あるいは *G.reductum* var. *schatzlianum* に近いタイプの植物が日本に *G.hyptiacanthum* として導入された。これらの種は頭頂部に、比較的多くの白っぽい花を同時に咲かせる。恐らく和名を付けた人はこのような光景から、頭に白い雪を被った、種として“雪冠玉”としたように思われる。



写真 18: 著者の所有する *G.hyptiacanthum*
ピルツから苗、フィールド番号 WD01

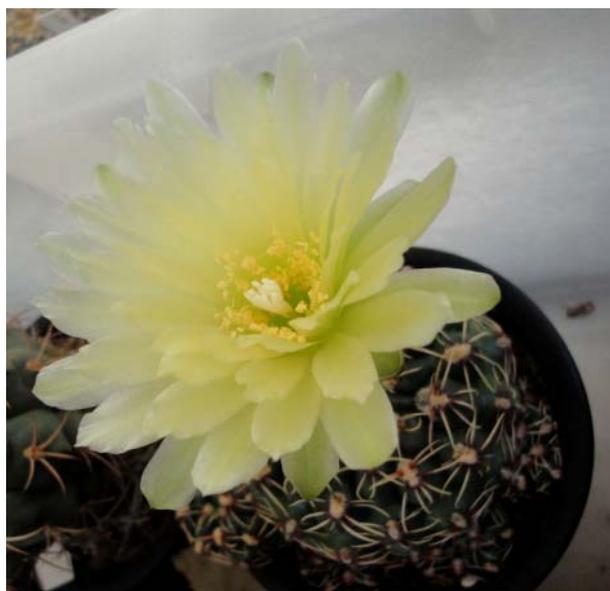


写真 16: 写真 19 の開花 *G.hyptiacanthum* WD01

和名に冠の付いた分類学種は多く存在する、ギムノカリキウム種に限定すれば、桃冠玉、征冠玉、王冠玉、月冠玉、雪冠玉、燻冠玉などが挙げられる。その中で、私は雪冠玉に非常に興味を覚えた。しかし業者のカタログ中でも、多くの趣味家のコレクション中でも今までこの種に遭遇した事が無いので、以前からこの和名に対する学名の *G.hyptiacanthum* にも興味を抱いて、調査したいと考えていたところ、私の購読している雑誌“Gymnocalycium”にこの種に関する論文が相次いで記載された。またインターネット雑誌“Schütziana”にも、この種に関連する論文が掲載された。それら論文の内容の紹介を含め、古い文献でそれらの内容を確認しながら雪冠玉の話題を纏めてみた。

入手できた参考文献は、論文で引用され、主張されている内容を確認したが、出来なかったものは、論文の著者を信頼して、そのまま記載した。